慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	安平哲二 社会主義経済理論の展開
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.7 (1954. 7) ,p.766(64)- 768(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19540701-0064
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時の雇傭率（或いは勞働者の就業率）は大體一定であつたとのべる。しかし我々は、マーシャルが、ピグーがのべる如く雇傭量の變化を考慮していたとは、思われない。尙こゝでピグーが、その著「ケインズの一般理論」で、現金殘高式の $n=pk$ から、「マーシャルの流動函數」$M=L(i,k)$ を想定したことを思い出す。第五章では、效用の問題が取扱われる。厚生經濟學の立場から效用の比較計量の可否が探究される。功利主義的厚生經濟學は、個人間の效用の比較計量の可能性を主張する。最近ではアームストロング、ケネディによつて究明されようとした。こゝにおけるピグーの論證は、やゝ明確を缺く。マーシャルの消費者餘剩の分析から計量可能性をとく。しかし他方マーシャルも述べている如く個人の效用は、貨幣額と同時に、個人の心理狀態と重要な關係がある。こゝから平均人を取出してそれと相對的比較の中に個人間の效用を計量しようとする。否計量が可能だととかれている。貨幣所得と個人的心理からなる相對的實質所得の分析的試みはなされていない。更に個人の效用と社會的厚生の關係が重要なものとなつてくる。しかし社會的價値判斷については、こゝではのべられていない。第六節は、社會主義について。マーシャルが現在生存していたならば、どのように考えたろうか。マーシャルの社會主義についての見解は、彼の論文「經濟的騎士道の社會的可能性」の中心がうかゞわれる。ピグーは、英國の現狀を説明するに、マーシャルの如上の論文から引用したり想定したりするわけである。ピグーは、社會主義政策の遂行による資本蓄積への重壓、經濟的エネルギーの不活潑を指摘する。もつとも一部の企業（例えば郵便、鐵道等）の國家規整による優秀性は認める。しかしこゝで我々が注意しなければならないのは、先にのべたマーシャルの論文である。彼はこの中で企業の大規模化、ビューロクラシーへの傾向を見拔くと共に、それらの企業に働く人々が、金錢それ自體よりも成攻と名譽を重ずることをのべている。そして更に健全な企業家精神として社會的道義心を要求している。利潤動機のみが、經濟的エネルギーの源泉の凡てではない。

以上本著の各節について簡單にのべてきた。マーシャルの理論は、既に教科書的に單純化され、因襲化されている。今日マーシャルをして生存せしめたならば、どのような見解をもつであろうか。我々が、ピグーに望むところのものは、所謂「眞のマーシャル」「偉大な經濟學者マーシャル」その人を畫いてくれることではなかつたろうか。

(A. C. Pigou; Alfred Marshall & Current Thought, 1958. pp. 85)　（山部　德雄）

安平哲二「社會主義經濟理論の展開」

東京都立大學教授安平哲二氏の新著は、社會主義經濟體制下における經濟計算論の諸問題を正面からとりあげ、かつソヴェートにおける多數の學者のこの方面に關する研究文獻をたんねんに追跡している點において注目すべき力作と思われる。

周知の如く、生產手段の所有と處分が國家の獨占的支配下にある經濟體制の下において、資源の合理的配分を（場所的ならびに時間的に）規定する規準は何であるかということは、現代の經濟理論上の一つの興味ある問題であつた。それは社會主義經濟が合理的に可能であるかどうかという純理論的な興味に加えて、ソヴェート經濟の現實に對する解釋と批判或いはまた資本主義對社會主義という兩體制の經濟的能率の比較という政治的興味が重なつて、實踐的にもなんらかの實りを期待される問題なのである。

著者は第一編において自由制社會主義の經濟計算論を紹介し、これに對するイギリスの準マルクス的經濟學者ドッグの經濟計算論と對比させる。著者の指摘する通り、ドッグの立場はソヴェート的な經濟體制を元にした經濟計算論であつて、前者すなわちランゲ流の經濟計算論の純理論的性格に比較して、一そう現實的具體性がある。その最も顯著の特長の一つはランゲ流の消費者優先の原理を否定して投資の政治的計畫化を承認し、それによつて市場經濟にみられる景氣變動や市場均衡の一般的不安定性、利子率と利潤率による制約を超える國民經濟の運營の可能性を指摘していることであろう。

しかしながら、それならば投資の計畫化の根據は何であるか。利子率と利潤率の制約を超える經濟計算の合理性は何であるか。この答えは容易にドッグから引出すことができない。政治的なプライオリティ・リストといだけでは答えにならない、少なくとも經濟技術的に資源配分の選擇を決定する基準が與えられなければならないからである。

この問題は今日のソヴェートの政治家と經濟學者とを惱ましている。現在のソ連の體制下においては市場的に成立する利潤率はないし、利子は殆ど全く無視されている。年々の政府の建設投資は無償還、無利子の原則で個々の產業と企業に分與される慣行である。したがつて用途の選擇に必要な全體的費用比較（代替的用途の意味の費用）を缺いている。このような缺陷はたとえば、ソ連政府の五ケ年計畫における重工業建設や個々の企業建設における資本の浪費に端的に現われていると察せられる。もとより資本財生產の重視はこの國の政府の意圖に出ずるものには相違ないが、一應それを受けいれるとしても、技術的な意味の費用計算の障碍は計畫を恣意的にし、したがつて浪費と節約の基準を曖昧にしてしまうのである。ソ連の經濟學者が投資の選擇においていかにしてその效率を測定するかに苦心するのもけだし當然であろう。

この書において著者が最も力を入れた部分もこの問題にあると思われる。第二編は前半においてソヴェート學界における價値、貨幣および價格の理論に關する一般的傾向を概說し、後半において資本效率の測定と投資選擇に關する現下の學說を紹介している。著者の俎上にのせられた學者はストルーミリン、ムスティスラウスキー、チェルノモルジクをはじめとしてなお幾人かの學者の名をあげることができる。これらの學者の一つ一つの特長をここに紹介する餘地はないが、そのいずれもが現在ソ連の慣行となつている固定資本回收期間比較による判定の方法に不滿をもちながら勞働費用の概念の中に一方において勞働價値を計算單位としながら他方において資本の時間的要素をとりいれなくてはならないこと、資本の減價と銷却の費用を考慮すべきこと、他の用途への轉用の效用を考慮すべきことを說いているのは興味がある。しかし、注意を國民經濟全體の立場から眺めれば、このような技術的計算は資本の總供給量と投資機會の關係より生ずる投資の基準に少しも貢獻し得ないため、極めて限られた妥當性しかもち得ないものであることは明かである。いずれにしても、ソ連學者の提案は現在の段階においては實際に行われている五ケ年計畫や年次計畫の作成において有用な貢獻をなしているとはいい難い狀態にある。

著者はこれらの多數の學者の見解とそれに對する外國の學者ベレトーム、ドッグ、キャプラン等の批判的見解を忠實に紹介することに努力を拂い、著者自身の見解を述べることをむしろ差控えている。筆者の讀後感を一言附加えるならば、投資效率の問題においても、價値と價格に關するこの國の理論と同じよ

うに、マルクスのイデオロギーと勞働價値法則は一つのやつかいな旅券であつて、旅行の眞實な目的のためには有效な役割を果しているとは認めがたい。著者は最後に、ソヴェートの理論が近代理論とも古典的マルクス理論とも異なり、ソヴェートの現段階に即應してマルクス理論を改訂しつつ體系化することに獨創的な展開を示しつつあると結んでいる。（昭和廿七年十二月、A五判三一一頁　三八〇圓　文京書院刊）　（氣賀　氣三）

W・G・バーチェット著
山田坂仁・小川修譯
「纒足を解いた中國」

「中國、それは眠れる獅子である」。十九世紀初頭、西歐資本主義の影響がインドを通じて東洋に及ぼうとした當時、しばしば西歐の知識人の話題となつたのは中國についてであつた。かつてマルコ・ポーロによつて紹介されたこの神祕の大陸、底知れぬ深さをもち無限の資源を藏しながらも、封建的な社會制度のもとに安逸の夢をむさぼる清國についてであつた。だが滿洲人の支配するこの國は、當時すでにその內部に幾多の矛盾をはらみ、いわゆる內憂外患ともども來つてその封建制度をゆすぶるようになつていた。この意味で一八四〇年のアヘン戰爭は中國にとつては實に大事件であつた。毛澤東ものべているように、中國の社會が封建的社會から半植民地的半封建的社會にかわりはじめたのはこのアヘン戰爭からであつて、中國人民の苦悶はこの時から全く新たなものとなつたのである。

それから十年、洪秀全による太平天國の亂はキリスト敎的な色彩をおび、農民一揆的な性格をとゞめてはいたけれども、とにかくそれは滿洲族の支配をくつがえし、イギリス資本と結んで次第に買辦化する封建勢力に抵抗した一大民族運動であつて、中國民衆にも彼等の敵が外國資本とこれに結びつく封建的支配者であることがほゞわかりかけて來たのであつた。しかも外國の帝國主義勢力の前には、あまりにも無力で卑屈な支配者たちが、一度民衆の前に立つては威丈高になることでは、われわれの祖國日本の支配者もかつての中國に劣らないが、とりわけ中國ではひどかつた。一九〇〇年の義和團事件は、このような賣國的な支配階級に對する中國民衆のはげしい怒りといきどおりの結果であつたのだ。

かくしてついに一九一一年十月孫文による清朝の打倒、いわゆる辛亥革命がおこり、一九一二年中華民國が成立したのだが、この革命はいわば實を結ばぬ「あだ花」と化する運命にあつたことは云うまでもない。なぜなら革命の主體となつたものは廣汎な大衆層と少數のインテリゲンチャと民族資本家ではあつたが、しかし實權をにぎつてこの革命の成果を强引に自己の手中におさめたものこそ、ほかならぬ袁世凱を中心とする大小の軍閥、しかも帝國主義列强と結ぶ軍閥であつたからである。封建的な「きずな」をたちきつて自由な近國家を夢見た中國のインテリゲンチャにとつてこれほどゆうつなことがあるだろうか。だがそれだけではない。一九一五年、第一次大戰のどさくさにまぎれて、二十一ケ條の侵略的な要求をつきつけた帝國主義日本の態度は、かつて見ぬいきどおりをもつて迎えられたのであつて、このようにして一九一九年五月四日有名な五・四運動が勃發したのである。そしてあらゆる封建勢力と帝國主義勢力に反抗して起ち立つたこれらの青年たちの心のうちには、すでにロシヤ革命の影響をうけてマルクス主義が根强く芽生えつゝあつたことも忘れてはならない。ふたたび毛澤東の言葉をかりるならば、「一九一九年は中國の民主主義革命が舊い民主主義革命から新しい民主主義革命に轉化した轉換點」であつた。そして五・四運動の影響がそしてその歷史的な意味が學生やインテリはもちろん勞働者や一般大衆の間に理解されたとき、中國人民の任務は「內戰をなくし、軍閥をたおし、國內平和を確立すること、國際帝國主義の壓迫をくつがえし、中華民族の完全獨立を達成すること、中國を統一して、ほんとうの民主共和國にすること」を目標として一九二一年七月、上海において中國共產黨が成立したのである。[2] だがその後一九二七年四月蔣介石の國民黨軍は、上海において革命の同盟者共產黨員を虐殺し、クーデターを行つてからは中國は益々反動化の方向をたどつた。魯迅の作品に見られる徹底したレアリズム、たとえようもないゆうつさ、弱者の悲哀は、半植民地中國の良心的なインテリの苦惱を、如實にそして敎訓的に物語つてくれよう。

（1）竹內好氏他、中國革命の思想、五八頁。
（2）胡喬木、中國共產黨の三十年、邦譯一四頁。

さて大分前置きが長くなつたが、どのように中國の歷史と社會に宿命的であるかのように見える封建的な「きずな」、いや日本をもふくめてアジヤ的といわれる地域に、あたかも網の目の如くに存在する封建遺制、進步に反對し革命を反革命におしもどして孫文を憤死させ魯迅を絕望させたこのものは、一體何であろうか。新しい中國は一體どのようにしてこれを克服しつゝあるか。バーチェットはこの點についてくわしくふれている。

ウィルフレッド・バーチェットは、オーストラリヤ出身の新聞記者で、第二次世界大戰中は米英軍に從つて各地を轉々として「人民民主主義の國々」や「巨濟島」などを書いているが、とくに外人としていち早く原爆都市廣島をおとずれて、「ノー・モア・ヒロシマ」を發した最初の人であることは餘りにも有名である。それにつけてもわれわれは、歐米人で中國問題についてのすぐれた研究家が多いことを知つておどろかざるを得ない。「中國の赤い星」のエドガー・スノーやオーエン・ラティモアは云うに及ばず、ジャツク・ベルデンや「中國の家族と社會」の著者として有名なオルガ・ラング女史、また「偉大なる道――朱德の生涯――」を書き殘してロンドンで客死したアメリカのジャーナリスト、アグネス・スメドレー女史そしてつねに中國民衆のよき理解者であり味方であつたパール・バック女史などは、われわれが深く頭を下げなければならぬ人々ではないだろうか。イギリスの經濟學を學び、フランス文學を語りドイツの哲學を論ずるわれわれは、偉大な隣國、中國について果してどれだけのことを知つているであろうか。われわれは、將來はともかく今迄に、ひとりのスノーも、ひとりのラティモアもいわんやひとりのスメドレーをもたなつたことを、アジヤ人として心から恥づかしく思うものである。

ともあれバーチェットのこの書には新聞記者としての豐富な體驗と見聞にもとづいて、一九三二年の中日戰爭から一九四九年十月の中華人民共和國の成立を經て、朝鮮戰爭勃發前後にいたるまでの中國民衆の、革命の苦難と建設のよろこびとが、るゝとして書きつづられている。アヘンに毒され、或は纒足で歩けなかつた中國人民が、どのようにして起ち上つたか。名もない田夫村娘が革命の實踐と行動とを通じていかに惱み苦しみそしてついに歡喜に到達することができたか。われわれはこれを讀み了つて新たな感激にひたることができよう。そして中國民衆の苦惱と歡喜とは、實に中國だけのものではない、近代的な意